

アイスランドにおける遭難事故

久 城 育 夫 (地質)

去る8月10日、理学部講師(地質学教室所属)の福山博之および柵山雅則の両君は、教養学部理科I類一年の堀越新人君と共にアイスランドにおいて火山の調査中に不慮の事故の為に逝去されま

した。両君とも火山学、岩石学の分野で優れた業績をあげており、今後日本のみならず世界の学界への貢献が期待されていただけにその死は惜しみても余りあるものがあります。以下、今回の事故

の概況およびその前後の経過を報告致します。

アイスランドは大西洋中央海嶺上に生じた火山島で、多数の興味ある火山が存在する。福山、柵山両君はこれまで主として日本列島の火山の研究を行って来たが、両君は更に日本列島のような島弧と対照的な海嶺上の火山との比較、特に火山の形態、噴火様式、噴出物の性質等の比較研究を行うこと、および以下のような岩石学的研究のための岩石試料を採取することを目的として今度の調査旅行を計画した。すなわち、福山君は北米セントヘレンズ火山の1980年の噴出物について高温・高圧下で実験を行い、もとのマグマの含水量を推定したが、同様の実験をアイスランドのヘクラ火山とアスキア火山の噴出物についても行い、海嶺上に噴出するマグマ中の水の量を推定することを意図していた。また、柵山君は日本列島の火山でマグマの混合によって生じた火山岩の存在を初めて明確に示したが、それと同様な火山岩がアスキア火山に知られているので、その岩石を採取し同君

独自の方法によって研究することを意図していた。

福山、柵山両君は本年春頃より今度の調査旅行の計画をたて始めた。福山君は昨年9月より米国ワシントン市のカーネギー研究所において、また、柵山君は一昨年9月より英国サウサンプトン大学において岩石学の研究を行う為にそれぞれ出張中であつたので、両君は主として書簡によって連絡を取り合つて計画をねつた。そして福山君はカーネギー研究所の研究の一環として、また柵山君は、サウサンプトン大学での研究が終了したので本学部地質学教室の岩石研究室の研究の一環として本調査を行うことになった。堀越君は、福山君の甥にあたり、地質学に強い興味を持っており本調査に参加することになった。調査の予定期間は8月3日～11日であつた。

柵山君は、8月2日ロンドンを発つて3日0時過ぎにレイキャヴィックに到着し一泊した。福山君は、堀越君とともに8月2日ニューヨークを發つて3日朝6時半頃レイキャヴィックに到着し柵山君

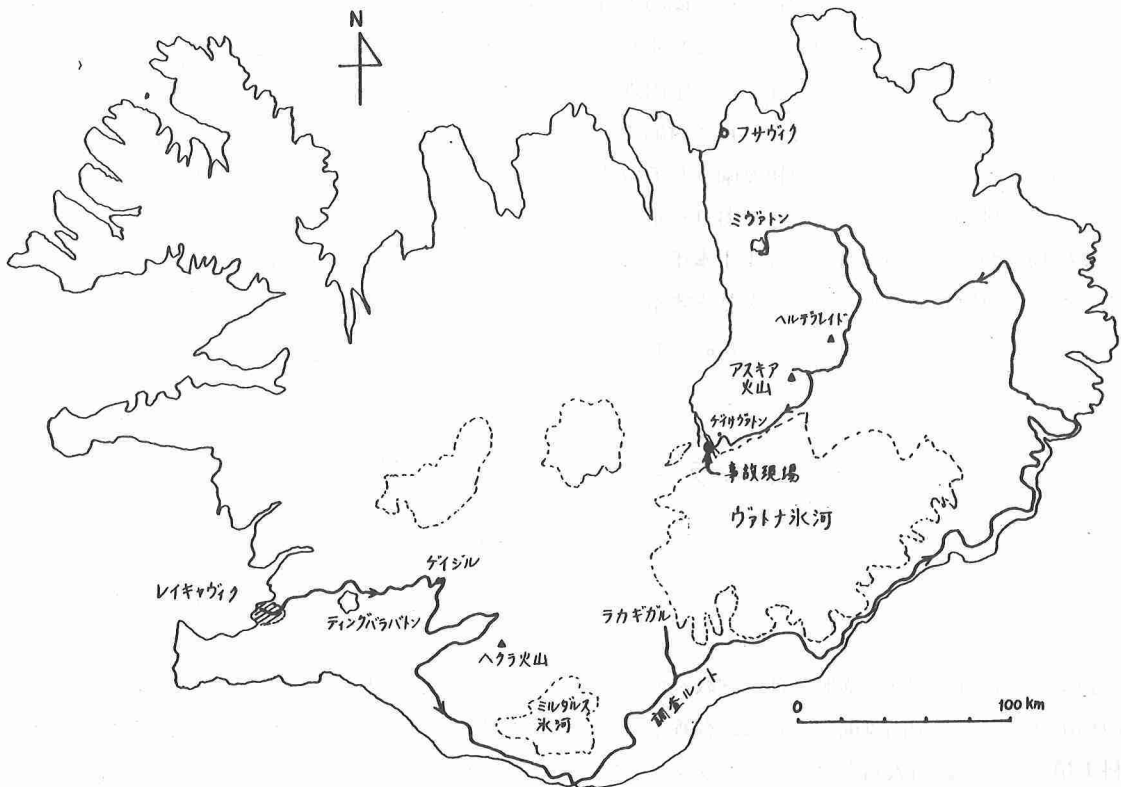


図 1

と合流した。3人は午前10時頃レイキャヴィクにおいてジープを借りた。その後ただちに調査に出発する予定であったが、ニューヨークからの荷物の到着が遅れたために出発は同日の夜になった。なお、3人は夜9時頃、福山君の友人であるアイスランド大学のヤコブソン博士宅を訪問している。しかし、同氏は不在であったため面会は出来なかった。それ以後の3人の行動とルートは目撃者の証言および遺品の中から発見されたフィルムに基づいたものである。(図1)

3人は3日夜、レイキャヴィクの東約30kmのティングバラバトンという湖の近くでキャンプした。4日は、同湖附近の枕状溶岩の観察をし、ゲイジルの間欠泉を見て、ヘクラ火山附近まで行った。5日は、ヘクラ火山とその噴出物の観察および岩石試料の採取を行った。6日はミルダルス氷河の末端を通過し、火山活動の盛んな中央帯南部のラカギガルを調査した。そこで3人を目撃した人がいる。その後ヴァトナ氷河の南側のどこかでキャンプした。7日は、アイスランドの東端をまわって、フサヴィクの南約40kmにあるミヴァトンという湖附近まで行った。8日は、ミヴァトン附近で種々の火山噴出物を観察した。

正午頃福山君は、アイスランド大学のヤコブソン博士の研究室に電話で、“調査は順調にしている。多くの興味ある岩石試料を採取することが出来た。”と報告している。その後3人はヘルデブレイド火山の東側を通過してアスキア火山に向い、同火山附近でキャンプした。9日朝、同火山のドレキの山小屋で管理人が3人を見ている。その日はアスキア火山で調査および岩石試料を採取し、アスキア火山南東でキャンプした。ここでも3人を目撃した人がいる。10日朝、3人はアスキア火山を出発し西へ向った。途中、3人がジープで走っているのを同方向に旅行する人に、また、事故現場から約3km東のゲイサバトンの山小屋の前を正午過ぎに通過するのを管理人に目撃されている。

3人の乗ったジープはリュプナブレッククヴィスル川を渡渉しようとした。対岸には道路の延長

が明瞭に見えていた。しかし、この川は、当日および前日の異常高温(約15℃)によりヴァトナ氷河が多量にとけて異常に増水していた。深さは約1.8mであった(通常は1m以下)。また、この川は氷河に発する川特有の褐色不透明の水のため川底は全く見えなかった。水温は0℃に近かった。ジープは川に進入した直後に流され、その後すぐ浸水して沈み、川底を転がりながらさらに流されたと考えられる。堀越君は、その途中でジープより脱出し、渡渉地点から約150m下流で東岸に上陸し、足の骨折のため腕の力で這って約300m離れた道路際まで達した。福山、柵山両君はジープから脱出した後死亡したか、あるいは車中で死亡した後流し出されたか不明である。ジープは渡渉地点から約300m下流で岩にひっかかって上下転倒した状態で停止した。

午後5時頃、2人のアイスランド人が現場附近を車で通りかかり、堀越君を発見、さらに下流でジープも発見した。2人は直ちにゲイサヴァトンの山小屋に急報し、救援を要請するため無線通信が可能なヘルドブレイドの山小屋に向った。ゲイサヴァトンの山小屋のバルドゥール・シングルードソン氏一家4人は現場に毛布と湯を持って急行したが、残念ながら堀越君はすでに死亡していた。死因は疲労・凍死であった。不運なことに当日午後寒冷前線が通過して気温が急激に低下し、雹が降った。シングルードソン氏はジープをロープで固定し、車中を調べたが人も物も残っていなかった。

11日午前3時頃、ヘルドブレイドの山小屋から無線で事故の第一報がアイスランド各地に伝えられた。無線通信により、事故現場から約100km西のニイダルーア附近を通行中であった自動車と連絡がとれ、同地の山小屋の宿泊者を起した。彼等は現場に向い、11日午前6時半頃現場に到着した。一方、現場附近を管轄するフサヴィク警察は無線連絡を受け、直ちに同地のガルダール救助隊を召集した。11日朝、フサヴィク警察の所長は救助隊7人と共に現場に向けて出発した。

午前9時頃、福山君の遺体が現場から約5km下

流の滝の直上の川の西岸で発見された。午後1時にフサヴィク警察の所長らは現場に到着し、遺体および遺品の検査、各所への連絡を行った。午後8時頃ジープ、2人の遺体および遺品等を回収してフサヴィクへ向った。

12日にミヴァトンおよびバルダーダルーアの救助隊が召集され、下流一帯を広く捜索し、午後5時過ぎに事故現場から約15km下流で柵山君の遺体

を発見した。3人の遺体は、いったんフサヴィクの病院に安置され検査された後レイキャヴィクに運ばれた。

15日、レイキャヴィクの教会において、福山、柵山、堀越三家の御遺族その他出席者のもとに葬儀が行われ、その後火葬された。葬儀においてアイスランド大統領の弔辞が届けられた。



図2. 事故後引き上げられたジープ。事故現場より約300m下流。後はリュブナブレッククヴィスル川

以上が、今回の事故およびその前後の経過の概況です。今回の事故は異常気温により数十年間で初めてという川の増水のために起った不運な遭難事故であり、現地の川の状態をよく知っていなければ避け得なかったものと思われます。今回の事故で2人の優秀な火山学者および将来有望なひとりの青年を失い誠に痛恨の極みです。また、遺された御家族のお歎きは如何ばかりかと心からお察し申し上げます。

今回の事故に関し、多くの方々にいろいろと御

心配、御迷惑をおかけいたしました。また、多くの方々の温い御援助、御協力をいただき関係者のひとりとして深く感謝いたしております。とくに、平野総長、江上理学部長、有馬評議員、石渡事務長、および神戸事務長補佐の方々には一方ならぬお世話になりました。さらに葬儀および慰霊祭には学部長をはじめ理学部の各教室から丁重な弔意および御援助をいただきました。ここで改めて厚く御礼申し上げます。なお、遺体と遺品の捜索、回収に献身的な労をとられたアイスランドの救助

隊、警察および山小屋の管理人、遺体の発見者の方々に対して、平野総長より感謝状が送られました。また、平野総長のアイスランド大統領への礼状が9月10日土屋代議士によって届けられました。

私達は、このような事故を再び起さないように今後調査には万全を期すつもりであります。しか

し、私達は亡くなられた3君が持っていた自然探究の情熱を決して失なうことなく、また、今後探究を躊躇することなく、3君の意志をついで更に一層励むつもりであります。

最後に、福山、柵山、堀越3君の御冥福をお祈り申し上げます。